広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践（その３）

榎　田　一　路
前　田　啓　朗
磯　田　貴　道
田　頭　憲　二
広島大学外国語教育研究センター

本稿は，2005年度より実施している広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践について，2007年度の取組を報告するものである。本プロジェクトの概要と英語授業との関連については，参考文献に挙げた昨年度，一昨年度の報告を参照されたい。

1　具体的な実践内容

まず，2007年度の具体的な取り組みを見ていく。以下，昨年度の実践内容を踏襲したものと，昨年度の実績を踏まえた本年度の新たな取り組みに分け，それぞれについて報告する。

(1) 昨年度の実践内容を踏襲したもの

昨年度の取り組みのうち，以下の内容については一定の成果が見られたので，本年度も継続して実行した。

・独自のクラス編成と教授内容の共通化

本取り組みの対象科目は，１年次前期開講の「コミュニケーションＩＢ（リーディング中心）」と，同後期開講の「コミュニケーションⅡＢ（リスニング中心）」である。これらの科目につき，経済学部生約150名については，他の学部と混在させず，単体で３レベルから成る習熟度別クラス編成を行った。また同時に，各レベルとも年間を通じて同一教員が担当することとした。さらに，共通の教科書を使用し，年間シラバスを共通化した。これにより，後期にクラスが変更した学生にも同一内容の授業を行えるようになった上，夏季休暇期間を含めた年間を通しての学習デザインが可能となった。

・教員間の定期的な情報交換

過去２年間の実践を通じて，担当教員はチームワークのもと，取り組みに必要なノウハウを高いレベルで共有できるようになった。本年度も必要に応じて定期的なミーティングを行い，共通認識の確認と意見交換を行った。

・単語テストおよび小テストの実施

日々の学習を習慣づけるため，毎回の授業開始時に単語テストを行うと同時に，授業内容についての小テストを毎月実施した。これに伴い，前期末および後期末に実施されるテストが全体の成績評価に占める比重を軽減させた。

・単語実力テストの実施（前期）

前期に学習する全単語を試験範囲としたテストを作成し，前期の第１週および最終週の授業で実施した。これは学生に学習の成果を実感させ，達成感と学習意欲を喚起すると同時に，後述する WBT 教材を含む反復的な単語学習の効果を検討するためのものである。

(2) 本年度の改善点と新たに付加した取り組み

以上の取組と同時に，本年度は，さらに以下のような点を改善あるいは新たに付加した。

・授業の同時開講とテストの共通化

CALL 教室数の制限により，これまで３クラスのうち２クラスを同時開講していたが，本年度新たに更新された CALL 教室や教育学部の CALL 教室を利用することで，本年度からは３クラスの同時開講が可能となった。これに伴い，単語テストや小テストの共通化など，よりレベルの高い実践を行うこととした。

・TOEIC-oriented な教授内容

本年度前期はいわゆる TOEIC 対策の総合教材，そして後期はビジネス事情に関する総合教材を教科書として用いた。これまでの２年間の授業で取り扱ってきた題材は，アメリカの文化事情に関するものであり，日常生活やビジネスなど，いわゆる TOEIC が題材としているトピックとは若干の相違が見られた。そこで，より TOEIC に特化した授業内容とすることで，学生のスコアに変化が生じるかどうかを見ることとした。

前期は *Power-Up Practice for the TOEIC Test: Living and Working in North America*（英宝社）を採用した。同書を採用した理由は，本授業の担当者が共著者として執筆に参加しているため，レベルと内容が学生の実情に見合っており，またテストや補助教材の作成等においても使い勝手がよいことによる。後期は *Front-runners in the 21st Century: 12 Outstanding Companies*（松柏社）を用いた。同書は日本国内の特色ある企業を取り上げ，それぞれの経営哲学や経営手法を紹介したもので，内容が経済学部の学生の興味に合致していると考えた。

授業計画を立てるにあたり，TOEIC に直接的に関連した題材とそれ以外のもののバランスを常に考えると同時に，問題演習以外の活動の充実を目指した。TOEIC スコアとはあくまで授業の結果の一部に過ぎないため，授業の成果全体をその優劣のみで判断することは，大学英語教育に携わる者としては厳に慎むべきであろう。また，TOEIC 対策の問題演習に終始する英語授業というのも本末転倒だからである。

・TOEIC を成績評価の一部に組み入れ

外国語教育研究センター長の許可を得て，経済学部を対象とした TOEIC(R)IP テストを前期・後期１回ずつ（７月・11月）実施し，これらの結果を授業の成績評価の一部として組み入れた。前期は５月の全学一斉実施もあるので，５月と７月のスコアのうち，高い方を評価の対象とした。

授業の成績評価に外部試験を組み合わせる試みについて，ここで少し説明しておく。教養課程の英語のように，複数の教員が同一の授業科目を担当する場合，同一科目にもかかわらず担当教員によって評価の偏りが生じるばかりか，その偏りはしばしばクラスの習熟度とは無関係で，なおかつ極端なものとなる場合がある。評価される側の学生から見ると，教養科目の成績は GPA

に直接影響し，専門課程における研究室の配属や卒業後の進路決定に大きく影響するため，言うまでもなく同一科目内で担当教員が異なっても，評価が公平である必要がある。しかしながら，説明したように，評価の偏りが顧みられていない現状において，学生に対する説明責任が十分に果たせるとは言い難い。このような同一科目における担当教員間の評価の偏りを改善し，個々の学生の英語運用能力により即した評価に調整するために，授業の成績評価にTOEICやGTECなどの外部試験を導入する試みが，既にいくつかの大学で実践されており，成果を上げていることは周知の通りである。

なお，本プロジェクトにおいて成績評価とTOEICスコアを組み合わせた目的は，上記のような評価の偏りの調整だけではない。本プロジェクトにおいては，教科書，進度，テストの内容，評価方法がすべてのクラスで統一されており，これまでの実践に基づき，上記のような評価の偏りが発生しにくい体制が既にできているからである。

今回，TOEICテストを成績評価に組み入れたのは，さらに２つの理由がある。一つは，TOEICテストがTOEIC-orientedな授業内容と当然ながら直接的に関連しており，授業の取り組みを経た英語運用能力の変化を測る尺度として最も妥当と考えられることによる。もう一つは，学生自身が授業の取り組みの度合いをTOEICで自己診断することで，さらなる学習に向けた動機づけを図るためである。この結果については，後述を行う。

・オリジナルWBT教材の使用

新たな教科書の採用に伴い，新たに作成したWBT教材は以下の通りである。

●単語学習用教材

単語学習用システムとして，本学の教養教育科目「マルチメディア英語演習」でも使われている「VPシステム」を引き続き使用した。これは単語の綴り・発音・意味を，目と耳と手を用いながら学習するもので，１チャプター100語を10語ずつのユニットに分け，単語学習と復習テストを行った後，さらに同じ100語をシャッフルして20語ずつに分けた同様の学習を５ユニット行う。最後に確認テストを行い，８割以上正解すれば，そのチャプターは合格となる。

昨年度までは同システムを夏季・冬季休暇中の宿題（前期・後期の単語復習）として使っていたが，本年度は毎回の単語テストの予習用として使用した。教科書を毎週１章ずつ進むものとし，各章より重要単語100語を選択した。100語の中には，過去の章で一度登場したものも繰り返し出題することで，確実な定着を図ることとした。学生には，VPによる事前の単語学習を毎週の課題とするとともに，単語の一覧表をあらかじめ配布し，パソコンがない環境でも学習できるようにした（この一覧表には意味は掲載されておらず，VPにアクセスすることで単語の意味と発音を学習できる）。授業開始時の単語テストには，試験範囲の100語から30語程度を出題した。

単語の音声ファイルは，音声合成技術を用いたテキスト読み上げ用ソフトで作成した。ここで使用した音声ファイルを利用し，後期は単語テストに聞き取りテストを含めることとした。

以下の教材も，一部クラスで使用した。

●教科書に準拠した教材（ディクテーション，文法，和文英訳）

WBT教材作成システム「YASUDA SYSTEM」を引き続き使用し，新教科書に準拠したコンテンツを作成した。教科書の内容のうち，リスニング，文法問題，和文英訳問題について，それ

ぞれ YASUDA SYSTEM の「KD システム」「サッと選択！」「サッと英作！」を用いて教材作成を行った。「KD システム」では，ディクテーションの結果が単語レベルで添削され，学習者はその結果をもとに聞き直しと答え合わせを反復的に行う。「サッと選択！」では，学習者が文法の四択問題に制限時間内に解答し，正解であれば解説が表示され，不正解の場合は後に再び出題される仕組みとなっているため，学習を完了するためには全問に正解しなければならない。「サッと英作！」は，和文英訳問題を自動的に添削するシステムで，学習者は解答のフィードバックをもとに，自分の文を正解に近づけていく。和文英訳問題では複数の正解を用意する必要があるが，「サッと英作！」では bud 言語と呼ばれる簡単な記述方法により，複数の正解への対応が可能となっている。

教科書の内容を WBT 化し，授業活動に組み入れることには，さまざまな利点がある。まず，学生は教材コンテンツに集中して取り組めるようになり，その過程で無理なく大量の英語に触れることができる。また，学習者は，個人のレベルに応じて，わかる箇所とわからない箇所を即座に判別することが可能であり，分からない箇所に学習を集中させることができる。また，授業中のやり残しや，欠席のため消化できなかった箇所は，次回の授業時までの課題として，授業時間

図1　VP システム

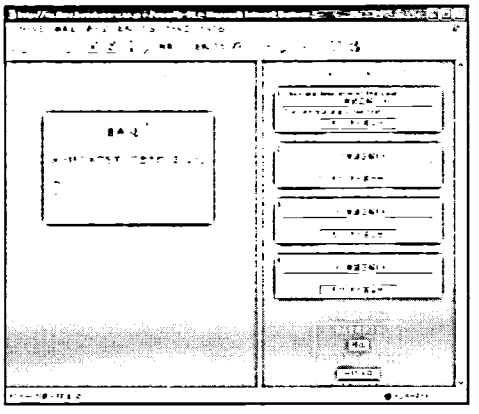

図2　KD システム

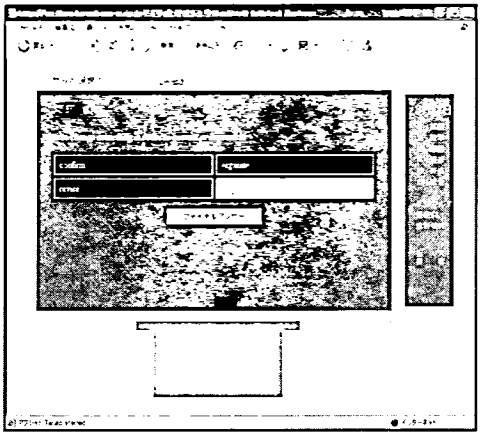

図3　サッと選択！

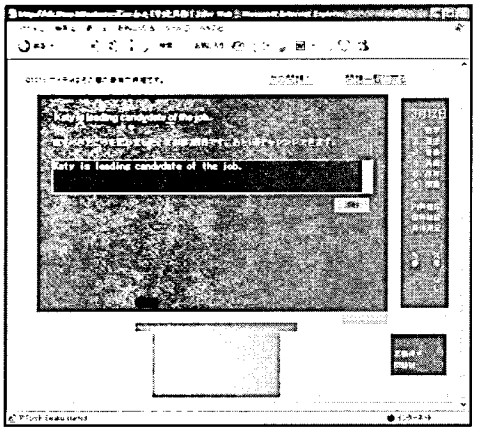

図4　サッと英作！

外に学内や自宅のパソコンから取り組むことができる。一方，教員は，授業中の学生の取り組みを個別にチェックしながら，多くの学生が苦手とするポイントを把握し，無駄のないフィードバックを与えることができる。

(3) 授業の進め方

具体的な授業の進め方は，以下の通りである。

表1　2007年度「コミュニケーションⅠB」「コミュニケーションⅡB」の進め方

「コミュニケーションⅠB」(前期)
1．(4/9)　授業概要の説明；英語実力診断テスト
2．(4/16) 単語テストと問題演習 — Unit 1: Finding a Job
3．(4/23) 単語テストと問題演習 — Unit 2: Dining Out
4．(5/7)　単語テストと問題演習 — Unit 3: Business Meeting
5．(5/14) 小テスト（4/16-5/7までの単語と教科書の内容）；TOEIC リスニング演習
6．(5/21) 単語テストと問題演習 — Unit 4: Travel (1)
7．(5/28) 単語テストと問題演習 — Unit 5: Entertainment (1)
8．(6/4)　単語テストと問題演習 — Unit 6: The Office
9．(6/11) 単語テストと問題演習 — Unit 7: Shopping
10. (6/18) 小テスト（5/21-6/11までの単語と教科書の内容）；TOEIC リスニング演習
11. (7/2)　単語テストと問題演習 — Unit 9: Entertainment (2)
12. (7/7)　単語テストと問題演習 — Unit 10: Sales and Marketing 5・6時限
13. (7/9)　単語テストと問題演習 — Unit 11: Technical Areas；授業アンケート
14. (7/14) 12:50-16:05（5-8時限）TOEIC IP テスト
15. (テスト期間中) 小テスト（6/25-7/9までの単語と教科書の内容）

「コミュニケーションⅡB」(後期)
1．(10/1)　授業概要の説明；前期単語復習テスト
2．(10/15) 単語テスト (1)；Chapter 1 キューピー
3．(10/22) 単語テスト (2)；Chapter 2 島津製作所
4．(10/29) 単語テスト (3)；Chapter 5 ヤイリギター
5．(11/12) 小テスト（10/15-10/29までの単語と教科書の内容）；リスニング演習
6．(11/17) 12:50-16:05（5-8時限，補講2回分）TOEIC IP テスト
7．(11/19) 単語テスト (4)；Chapter 6 ケージーエス
8．(11/26) 単語テスト (5)；Chapter 7 カシオ計算機
9．(12/3)　単語テスト (6)；Chapter 8 三和酒類
10. (12/10) 単語テスト (7)；Chapter 9 花王
11. (12/17) 小テスト（11/19-12/10までの単語と教科書の内容）；リスニング演習
12. (冬休みの宿題) Chapter 10 京セラ，Chapter 11 サンリオ
13. (1/21)　単語テスト (8)；Chapter 12 モスフードサービス；授業アンケート
14. (2/2)　12:50-16:05（5-8時限，補講2回分）TOEIC 直前講座
15. (テスト期間中) 小テスト（冬休みの宿題および1/21の単語と教科書の内容）

2．TOEIC 得点の推移

学生の英語力の変化を測定するため，TOEIC(R)IP テストを３度実施した。１度目は５月で，この時のデータは本学で実施している TOEIC(R) 全学一斉実施のデータを利用したものである。この受験の時期は，前期の授業が５回行われた後であった。２度目は７月で，前期の授業が終わった学期末に実施した。１度目の実施から８週間後である。３度目は11月で，後期の授業が６回行われた後に実施された。

それぞれの実施回の平均値と標準偏差は表２のとおりであった。なお，７月と11月の実施時には，試験にまじめに取り組んだかどうか自己申告させ，まじめには取り組まなかったと申告した者のスコアは除外して表２の数値を算出した。

表2　TOEIC スコアの推移

	人数	全体		リスニング		リーディング	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
５月	155	449.77	83.75	245.90	47.79	203.87	52.57
７月	132	479.70	83.79	254.39	51.92	225.30	48.37
11月	118	472.67	77.51	245.59	44.55	227.08	51.29

表１のうち，全体のスコアの平均値の推移を見ると，５月から７月にかけて約30点上昇していることが分かる。ただし７月から11月にかけては，若干の変動はあるものの，７月の水準とあまり変わらないと言える。11月は，前期の授業のあとに夏季休業期間があり学習が一時中断したことであまり変化がなかったのではないかと推測される。

リーディングとリスニングでの伸びを個別に見ると，特にリーディングでの伸びが大きい。リスニングでは得点の変動は小さいが，リーディングでは20点以上の上昇がみられる。

3．到達度に基づく評価

この授業では，到達度に基づく評価を実施するために，一般的な英語運用能力を測定する TOEIC のスコアによる評価と，授業での評価を総合した評価を行った。ここでは前期の評価においてとられた評価方法と結果を報告する。

授業での評価は，毎時行われる単語テストおよび学期中３回行われる小テストの得点を総合して，90％以上の者がＳ（秀），80～89％の者がＡ（優），70～79％の者がＢ（良），60～69％の者がＣ（可），59％以下の者がＤ（不可）となる。これは従来行われてきた方法である。

一方，TOEIC による評価は次のような方法で行われた。これまでに本学で実施された TOEIC 全学一斉実施の結果より，全学の平均は450点前後，標準偏差は100前後であることが分かっている。そのため，平均を450，標準偏差を100とし，平均値＋1.5標準偏差以上（600点以上）の範囲にある者をＳ，平均値＋0.5標準偏差から＋1.5未満（500点から595点）の範囲にある者をＡ，平均値±0.5標準偏差（400点から495点）の範囲にある者をＢ，平均値－0.5標準偏差未満（395点以下）の範囲にある者をＣ，未受験の者はＤとした。なお，前期には TOEIC(R)IP を５月と７月の２度受験しているが，評価ではこのうち良いほうのスコアを採用した。

授業と TOEIC での２つの評価を組み合わせるにあたっては，単純に２つの平均をとるのではなく，授業での評価にウエイトを置いた評定表を作成した。それが表３である。

表3　評価の組み合わせ

		TOEICによる評価				
		～600	595～500	495～400	395～	未受験
		S	A	B	C	D
授業での評価	S	S	S	A	A	B
	A	S	A	A	B	B
	B	A	A	B	B	C
	C	B	C	C	C	C
	D	D	D	D	D	D

授業での評価がSからBでは，授業での評価を重視して，その組み合わせにおいて切り上げを行う。具体的には，授業での評価がSで，TOEICでの評価がAからCの場合，TOEICの評価よりも高い評定となる。同様に授業での評価がAでTOEICでの評価がBやCの場合，それよりも高い評定となる。授業での評価がBでTOEICでの評価がCの場合，評定はBとなる。

一方で，授業での評価がCである場合は，TOEICでSの場合を除き，すべてCとなる。また，授業でDの場合，TOEICでの評定にかかわらずDとなる。

このような評価の組み合わせ方法により実施された前期の評価の結果，それぞれの組み合わせに属する人数は表4のようになった。数字の右側にある括弧内のアルファベットは，表2に示される組み合わせた結果の評定である。

表4　組み合わせた評価の結果

		TOEICによる評価					合計
		S	A	B	C	未受験	
授業での評価	S	3 (S)	11 (S)	0 (A)	2 (A)	0 (B)	16
	A	9 (S)	26 (A)	23 (A)	1 (B)	0 (B)	59
	B	1 (A)	20 (A)	26 (B)	5 (B)	0 (C)	52
	C	0 (B)	8 (C)	9 (C)	8 (C)	0 (C)	25
	D	0 (D)	0 (D)	0 (D)	3 (D)	1 (D)	4
	合計	13	65	58	19	1	156

この結果から授業での評価とTOEICでの評価の関係を考察するために，授業での評価の段階ごとにデータを取り出し，TOEICでの評価の各段階に属する人数をグラフに表したそれが次の図5～9である。図中の数字は，その評価に属する人数を示す。

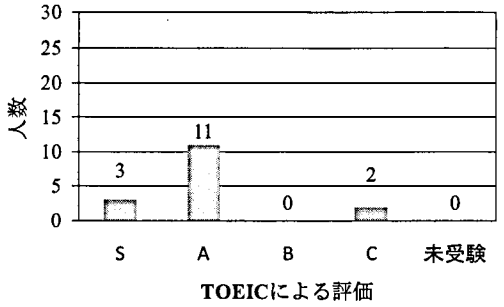

図5　授業での評価がSの者のTOEICでの評価

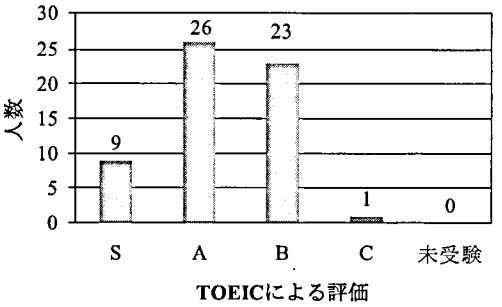

図6　授業での評価がAの者のTOEICでの評価

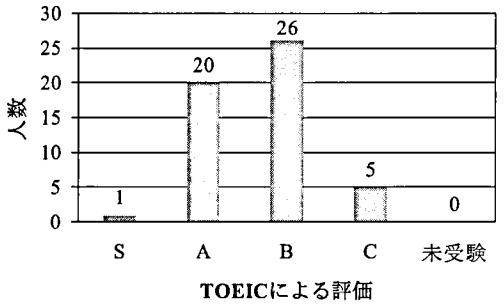

図7　授業での評価がBの者のTOEICでの評価

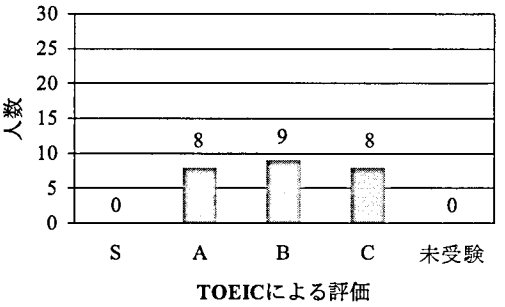

図8　授業での評価がCの者のTOEICでの評価

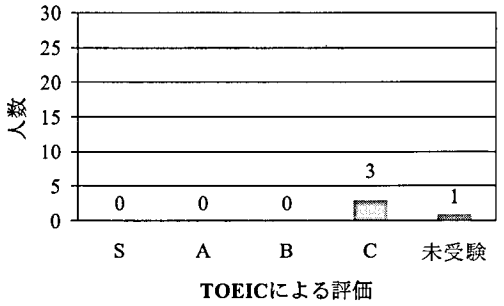

図9　授業での評価がDの者のTOEICでの評価

図5から9を見ると，TOEICによる評定では多くの者がAないしはBにあることが分かる。この結果をみると，TOEICによる評定で用いたSからDの区切りは，当該の学生に対して適切であったと考えられる。また，授業での評価が高くなるとTOEICの評価も高くなる傾向にあることが分かる。このため，授業での評価とTOEICでの評価を組み合わせることは妥当と考えられる。

一部において，授業とTOEICの2つの評価が乖離するケースが見られる。これには2つのケースがみられる。ひとつは，授業での評価が高いがTOEICでの評価が低いため，最終的な評定が

授業での評定よりも下がるケースであり，もう一方はその逆で，授業での評価は低いがTOEICでの評価が高いため，最終的な評定が授業での評定よりも上がるケースである。このようなケースは，評価の柱が2つあり，それらを組み合わせる場合には避けられないものであろう。授業での評価がそのまま最終的な評価とはならないことは，学生や教員にとっては従来の方法と異なるために違和感が残ることがあるかもしれない。しかし，カリキュラムのねらいが英語によるコミュニケーション能力の向上にあることから，一般的な英語運用能力の指標と授業での評価を組み合わせて到達度に基づく評価を行うことは必要なことである。また，担当教員が異なる場合，各々の評価のみを取り入れるのではなく共通の指標を評価に組み入れることで，担当教員間の評価の一貫性が改善される。それにより，学生間の公平性という点が向上されると思われる。

最後に，今回このような評価方法をとったことに対して，学生から不満の声は聞かれなかったことを付記しておきたい。学期末に行われた授業評価アンケートでは，TOEICを評価に用いることに対して反対や疑問のコメントはなかった。

5　課題と今後の見通し

課題と今後の見通しとしては，以下の点が挙げられる。

・前期教科書の通年化

本年度は前期・後期で教科書を変えたが，それぞれ消化不良に終わった感が否めない。TOEIC-orientedな内容としては前期の教科書の使用が望ましいと思われるが，1章あたりの分量の多さから，毎回1章ずつという進度を維持するのは難しいことがわかった。そこで，来年度は前期の教科書を通年で使用することとし，前期・後期に進度調整用の週を加えることとする。

・WBT教材の積極的な利用

本年度，VPによるオンラインでの単語学習を毎週の課題とし，毎週100語をテスト範囲としたが，これは学生に大変好評だったようである。学期末に行われた授業評価アンケートでも，「オンライン単語学習は一度やっただけでも9割くらいは覚えられるので，とても重宝しました」，「週に100単語覚えさせてもらったので，単語帳を買う必要がなく助かりましたし，自分だけで覚えるよりも能率が上がったと思います」などの好意的なコメントが多く，学生自身も効果を実感している様子であった。

コンピュータを利用した英語学習が本プロジェクトの中心であることから，来年度以降も学習効果の向上を目指し，WBT教材を積極的に利用していきたい。具体的には，本年度使用した教科書準拠のWBT教材を引き続き使用するのに加え，リスニング中心の科目である後期「コミュニケーションⅡB」において，集中的にリスニング活動を行うためのWBT教材を新たに導入する予定である。

・年間を通じた学習の持続

5月，7月，11月のTOEIC平均スコアを比較すると，おおむね5月から7月に上昇し，7月と11月はあまり変化がないという結果となった。これは前述したように後者が夏季休業期間を挟み学習が一時中断したことに加え，後期の授業が前期に比べてTOEICを直接的に扱わなくなった点が主な理由として挙げられるだろう。TOEICスコアは授業の成果のごく一部に過ぎないた

め，この結果だけで後期授業を総括することは不可能だが，TOEIC を利用している目的の一つが学生の動機づけであることを考えれば，11月の結果は今後の課題となるものと思われる。これは，短期的なスコア向上の問題ではなく，年間を通じて学習をどう持続させ，自律的な学習態度を育成するかという課題として考えるべきだろう。

・新シラバスへの対応と TOEIC の利用

2008年度より，広島大学では教養教育の英語科目にいわゆる観点別評価が導入され，シラバスおよび評価規準・基準が一新されるため，本授業もそれらに即した授業内容と評価方法を考える必要がある。観点別評価においては，授業活動や課題への取り組み状況，テスト等のさまざまな評価資料を収集し，それぞれの観点に応じて資料を適切に用いながら評価を行う必要がある。限られた授業時間の中で適正かつ効率的な評価を行うために，TOEIC テストで測れる部分について，そのスコアを評価資料として用いることは十分に妥当性があると考えられる。

参考文献

榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二．(2006)．「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践（その１）」『広島外国語教育研究』*9*，115-125.

榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二．(2007)．「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践（その２）」『広島外国語教育研究』*10*，85-95.

ABSTRACT

Classroom Practice in English Classes Based on the Hiroshima University Campus Ubiquitous Project: Report III

Kazumichi ENOKIDA
Hiroaki MAEDA
Takamichi ISODA
Kenji TAGASHIRA
Institute for Foreign Language Research and Education,
Hiroshima University

This article provides an outline of the follow-up classroom practice in English classes based on the Hiroshima University Campus Ubiquitous Project, and presents the details of the teaching syllabus/procedures, teaching materials for WBT (Web Based Training), and also a new evaluation system using TOEIC scores.

In this project, schedules are set up so that the same three teachers will take charge of the same English classes (Communication IB and Communication IIB) during the course of the whole year. The students are first-year students in the Department of Economics, and each class is conducted by means of a CALL (Computer Assisted Language Learning) classroom, as well as an online network system. Based on achievements and problems during the previous year's project (see, Enokida, Maeda, Isoda, & Tagashira, 2006, 2007), some attempts are instigated for further curriculum/lesson developments: offering the classes at the same period of the time, incorporating the TOEIC scores into the evaluation system, and providing new original WBT materials.